

かささぎ通信 第140号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2024年 10月 11日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

2024年9月の「森三郎の作品を読む会」では、「父」(『雪
こんこんお寺の柿の木』1943年12月)と「副級長」(『西瓜』
(二作品とも『赤い鳥』1933年9月号)を読みました。

「父」は七之丞・蜻蛉という若い夫婦と三人の子どもの話です。妻の蜻蛉は長患いで若くして亡くなりますが、弱々しく「もう死にます」という妻を励まし、七之丞は「お前は私に子どもを産んでくれなかつた。お前に逝かれてどうして私一人で暮らしていかれよう」と言います。話の中の「三人の子ども」というのは、妻が「あの世から子どもを差し上げます」と言つて夫に残した子どもたちなのです。話全体は、七之丞の夢に現れる亡き妻・蜻蛉が進行役を務めていきます。

妻の最期の言葉通り夫の夢の中に、妻が三人の子どもと共に立っていました。子どもは梅若と松若という二人の男の子と妹の桜姫です。その後、七之丞は妻のお墓の脇から芽生えた梅・松・桜を妻が残してくれた子どもと思ひ自分の家の庭に植え、大切に育てます。五年が過ぎ、三本の若木が七之丞と肩を並べるくらいに伸びた時、七之丞の主人の右近と隣国の左近との間に戦いが始まります。亡くなった妻の父は左近の家来でした。戦いの前夜、夢に現れた妻は、今度の戦いに梅若・松若が祖父に従つて初陣に出ることを許してほしいと願います。右近方の勝利の酒盛りの時、敵方の老臣に付き添つたその孫らしい二人の若武者の奮闘ぶりを見た主人の右近が「敵ながら見事だつた」と語りました。家に帰ると庭の梅と松の木はさんざんに枝や幹を傷つけられ、根こそぎにされてしまいました。残つた桜の木が初めてきれいな花をつけた頃、蜻蛉がまた夢に現れて、桜姫が高貴な方から妻にしたいと望まれていると話します。その言葉通り、庭の桜は帝の所望で内裏の庭に植えられることになります。こうして七之丞の庭の三本の木は皆無くなつてしまつたのです。七之丞は妻の名を呼び「お前は三人の子どもを、次々と私から取り上げてしまつたね。私は一体どうすればいいんだ」とつぶやきます。

妻の死を前にした時、七之丞は妻の忘れ形見の子どもでもいたならという思いを吐露しました。それではと、蜻蛉は七之丞に子どもを持つて父親になる夢を味わわせてくれます。しかし初めに「でも人の子の親はかなしいものです」と念を押します。そして桜姫までが離れていき再び一人取り残される不安を訴える七之丞に「親というものは、子どもの幸福を考えてやらなければなりません」と言い、親に許されているのは「その子のいい親だつたことを淋しく誇ることだけ」であり、「人の子の親はかなしいものです」と繰り返しました。

読み終わつて当日集まつたメンバーはそれぞれ親の立場から、自分と子どもとの距離感について考えたり、あるいは子どもとしての自分が親にはどのように映つていたのか思い巡らしたりしました。

またこの話が発表された昭和十八年に着目して、戦争で子どもを取られてしまつた親の気持ちが出てくるのではないかという感想も出ました。確かに梅若・松若の活躍について七之丞は「よくやつてくれた」と讃えながらも寂しさをにじませています。

『赤い鳥』の作品は昭和八年九月号の「副級長」(森三郎)と「西瓜」(名義…早川七郎)の二作を読みました。「副級長」の前半では級の皆のいたずらを級長の永田君と一緒に副級長の克巳が先生に謝り許されます。後半ではみんなが許されたのは自分たちのお陰だと偉くなったような気がした克巳が、友だちを誘つて汽車のレールの上に釘を置くという危ない遊びをし、後悔し副級長であることが恥ずかしくなります。「西瓜」も体育の時間を休んでいた自分と茂ちゃんが、そのうちに学校裏のお島婆さんの家の前に行き冷やしていた西瓜をボール代わりにして、西瓜を割つてしまいます。悪いことをしてしまつたという後悔にさいなまれる点で「副級長」と同じテーマの作品でした。

〈次回予定〉2024年11月8日(金)午後一時半~三時半

「ひぐらしの村」(『雪こんこんお寺の柿の木』1943.12)

「杉でつぼう」(『赤い鳥』1933.10)